

学校経営のポイント

大学と市との地域連携事業“文化講演会”

若井 彌一

国立大学とその所在地域との連携事業が、各大学多様に展開されている（正確には「されてきた」と表現すべきか）。

地域との連携は、今日では国立大学だけでなく、公立も私立も各大学の「経営戦略の一環」として積極的に取組みを進めているものであり、地域の住民啓発と地域振興にとって欠かせないほどの重要な営みとなっている。

今回は、筆者の勤務大学の取組み事例を1つ紹介しておきたい。

「文化講演会」でダニエル・カール氏講演

平成23年11月23日（祝日「勤労感謝の日」）、午後、上越教育大学講堂を会場として、上越市と上越教育大学主催、上越教育大学振興協力会共催による恒例の「文化講演会」が開催された。

講師は、ダニエル・カール（Daniel Kahl・アメリカ）氏で、演題は「頑張っぺ、オラの大好きな日本～地域には必ず“宝”がある～」であった。

今や、親日派著名人のひとりに数えられる存在として活躍されている人物であるから、細かな経歴は一切省略する。

講演内容は、氏が来日以来、各地（関西、新潟県佐渡市、山形県米沢市）での日本語との出会いや習得の経過・苦労等をユーモラスに語る事がひとつの柱になっていた。

とくに紹介しておきたいと感じ入ったのが、講演の最後のおよそ次のような語りの部分である（要約）。

「日本はバブル崩壊、さらにその後のリーマンショックで追い打ちをかけられ、また、今年の3月11日発生の大震災できわめて大きな痛手を負った。日本人は、「自慢」と「謙遜」の好ましいバランスを

保ってきていたのだが、これら一連の経過でバランス感覚を失ってしまっているのではないか。

これまで築いてきた数々の長所、実績（成果）について、もっと誇っていいのに、最近では批判的側面だけが強調されているくらいがあたりはしないか。教育（制度）についても、日本の教育は、集团的（全体的）な学力の育成という観点からみれば、世界的にみても、紛れもないトップグループの1つであるのに、なぜか負の側面だけが強調されすぎられるように思われる。もっとトータルに見て、評価（自慢）でできる側面を改めて自覚し、みんなが声に出すことが大切だと思う」

「教育実践の側」から日本復興への提言を

上記のダニエル・カール氏の指摘を、「教育」に携わっている日本全国の方々に、この際、お伝えしておく必要があると判断した次第である。

浮き足立ってしまい、これまでの教育の取組みがことごとく「失敗」であったとの一面的な批判をもの知り顔で展開する人々もいる。部分的に的を射ているとしても、なぜ、これほどにオーバーな表現でアンバランスな主張をするのか、と首をかしげることがままあった。

このようなときこそ教育に携わっている人々は、一見、地道な取組みであっても、その取組みを人間の健全な発達、社会の望ましい発展という観点からとらえて、有意義な実践をどんどん紹介・提言することに努めたい。

また、日本の堅実な復興への教育的実践の紹介・提言を、マスコミや教育誌で積極的に取り上げていくことも要望しておきたい。

（わかい・やいち＝上越教育大学長）

●11月28日発売！ 東日本大震災後の学校防災と学校の危機管理諸問題への対応！

《管理職演習》学校防災・危機管理の最新法律問題

菱村 幸彦（国立教育政策研究所名誉所員）【編】

A5判 200頁／定価 2310円

研修誌・図書の小社への直接注文は、無料FAX 0120-462-488をご利用ください（24時間受付・即日発送）